どろんこ

邦光史郎

どろんこ

検印廃止　1967©

■著者／邦光史郎

■発行日／昭和42年5月5日／第一刷

■発行者／徳間康快

■印刷所／ナガナエ印刷

■製本所／明泉堂

■発行所／徳間書店

東京都港区新橋4－10

TEL434・6191

振替　東京　443992

乱丁・落丁はおとりかえいたします。

定価　290円

どろんこ

■

邦光史郎

■

徳間書店

どろんこ■もくじ

夜光虫■5
両手に花■27
関東空っ風■53
S・O・S■79
香港便り■105
青いカナリヤ■129
雪やこんこん■155
ヤマカン商法■179
長いトンネル■204
吹くや春風■227

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbo

■装幀・さし絵／梅本アキラ

夜光虫

海の中にはもう一つ別の世界が隠されている。
そこは緑の王国なのだ。
明るく燃え立つような緑の海藻がゆらめき、射し込んでくる陽光さえ、ここでは淡くエメラルド色に輝やいている。
海藻の密林のあいだをくぐって、青い魚群がつづいていた。
褐色に光る岩棚を避けて、サチコは更に潜った。
もう少しで五メートルの壁が破れる。
五メートル潜れば、一人前の海女のように、アワビが手に入る。
あと一メートル。もう少しで深い裂け目をのぞかせている岩場にとどく。
もっと深く、もっと深く落ちて行かなくてはならない。
けれど、にわかに水圧がかかり、しめつけられる苦しさに、サチコはもがいた。
くるしい。胸がはり裂けそうだ。
鼓膜が破れる。
痛い。耳が痛い。頭が割れそうだ。
鼻腔に誰かが指をさし込み、ぐいぐいこじ上げているように苦しくてならない。
もうだめだ。もう潜れない。
頭もからだも、じいんとしびれて熱く、サチコは動きを喪った。
死ぬかもしれない。ふとそう思った。
海女が溺れるといえば、奇妙に聞こえるかも知れないが、サチコの母親も溺れて死んだようなものなのだ。
もう一つだけ多くアワビを獲りたいと思って、海面に戻りそこなってしまった。
たった一つの貝のために、人間が命を喪う。
そんな馬鹿なと陸の人間は笑うだろうが、貝一つに一家何人かの生活がかかっている。
サチコは、大きく水を掻いた。

すこしでも深くとねがった自分が、こんどはすこしでも早く浮き上がりたいとあせっているのだ。
苦しい。もう海女になどなりたいとは思わない。
無事に水面に戻れたなら、こんどこそ決心しよう。
海女になって貝一つと引き換えに生命を喪うぐらいなら、都会へ出てキャバレエか何かで働いた方がましだ。
嘲笑うように、ホンダワラの群れがゆらゆらと緑の手を開いて揺れた。
それが自分を招きよせる死の手に見えたのだ。
サチコは思わず眼をとじた。
水を掻いているはずの腕が、ひとりでに胸許を掻きむしっていたのだろう。
ぴっちりと襟許を合わせていたはずの白衣がはだけて、まだ固い乳房が水に光った。
そして、ゆらゆらと白い海女着が波間に揺れひろがりつつ浮かび上がってきた時、一足早く海面に戻っていた照江はおどろきの声を上げた。
ふつうなら、ヒューッと、磯笛が聞こえるはずなのだ。
磯笛と言っても、別段笛を持っているわけではない。
海面に浮きあがってきた海女が口をすぼめて深々と息を吸い込む、その時ひとりでに、ヒューッと笛を吹くような声を発するのである。
それは悲しげな音色であるが、無事に海底から戻ったという、ささやかな喜びの合図ともいえるのだ。
けれど、サチコは磯笛を吹くことさえできなかった。
ぐったりと海上にただようサチコのからだを抱きよせて、照江はあわてた。
「サチコ」
耳許で叫んだが、その蒼ざめた頬に血の色を蘇らせることはできなかった。
「誰かきて……」
あたりを見回したが、このあたりに潜っている海女の姿は、どこにもなかった。
たった二人だけで練習にきたことが悪かったのだ。
「サチコオ……」
泣き声になって照江はとほうにくれた。

負けん気の強いサチコのことだから、きっと自分より深く潜ろうとして、戻り損ねたのにちがいない。
そう言えば、この人の母親もこの海で死んでいる。
にわかに海の色が意地悪く黒ずんできたようだ。
ふと、照江は、歌うような男の声を聞いたと思った。
頭をめぐらせてみると、磯砂の岩かげに、たき火をたいている男の姿が見えた。
「夕やけ小やけの赤とんぼ……」
いかにものん気そうな声なのである。
「タスケテ……」
照江は精いっぱい声を張った。
「……?」
やっと男は気づいたらしい。急いで海中に駈け込もうとして、こう答えた。
「すんまへん。僕よう泳ぎまへんねン」
その男、山本寛太郎は、海の中で足踏みをした。
すると、ずるずると靴底の砂が崩れて思わず海中へ引き込まれそうになった。
「こらあかん、こっちまで土左衛門や……」

あわてて砂浜に戻ると、靴の中でぼこぼこと水が鳴った。
「えらい損や、よそ行きの白靴が案配台なしやがな」
膝までぐっしょりと潮水に漬かってしまったのだ。
濡れたズボンが、にわかに塩垂れて情なく細っていた。
けれど、ようやく浅瀬までたどり着いた二人の海女を見てはほって置く訳には行かない。
またざぶざぶと海中に走り込んで、ぐったりと重いサチコのからだを受けとめた。
「こんなあんた、海女が溺れてたんでは、どもなりまへんがな」
そうボヤこうとしたとたんに、ざぶりと大波が打ちよせてきて、思わず寛太郎は足を浚われた。
あっと言う間もなく尻餅をついて、たっぷり塩辛い水を呑み込んだ。
そればかりか、倒れた拍子に、どすんとサチコのからだは磯砂の上に投げ出されていた。
だが、何が幸いするか分からない。
投げ出されたショックで、サチコは意識を取り戻した。
ふつう海女が溺れかかった時には、頬を打ったり髪の毛を引っ張ったりして、ショック療法を施すものなのだ。
「サチコ……」
急いで照江は、投げ出されたサチコのからだにかけ寄り、馬乗りになって人工呼吸を行なった。
その時には、人目など構っている余裕はなかったのである。
けれど山本寛太郎は、全身ずぶ濡れになっただけの甲斐があったと思った。
通常このあたりの海女は、昔からそうであったように白い襦袢様の肌着と、同じく白い木綿の腰巻を身にまとっている。
それがすっかりはだけて半裸になってしまっていたのだ。そして一方馬乗りになっている照江だって衣服の乱れなど気にしてはおれなかった。

だが、男の眼ほど残酷なものはない。見るまいと抑制しても、ひとりでに視線が女の肌に吸い寄せられて離れないのだ。

まだ年若い海女たちであった。

成熟の早い漁村の娘たちなので、胸も腰も、まことにふくよかであるが、髪を掻き上げた首筋や肩のあたりに、まだ稚さが匂っているようだ。

寛太郎は、海中に潜かったまま、首をつき出すようにして見惚れていた。

そういう彼自身も、まだ二十三歳になったばかりなのだ。

男は見ることによって性的情緒を覚え、女は見られることによって性感を早めるというが、そうかもしれない。

サチコは、自分が見られていることに気づいた。

息苦しさや、胸のあえぎなど、そうなれば問題ではなかった。

火のように羞恥心が燃えて、それが怒りに変わった。

「もうええよって、どいて」

折角人工呼吸をしてくれている照江のからだを突きのけるようにして、サチコは起き上がった。

あわててはだけた海女着を掻き寄せると、炎より激しい怒りをこめて寛太郎を睨みつけた。

「あんたそんな所で何をしてるの」

小石のような詰問の声を投げつけたのである。

「何してるて、僕……」

「ひとが死にかかってるのに、にやにや眺めてるなんて、男の屑やわ」

気性の激しい女であった。

「そんな殺生な。僕かて、ちゃんと手伝うてましたがな。そやけどあんまり近寄ったらいかん思うて、ここで遠慮してましてんがな」

たしかに、彼はまだ海中にたたずんでいた。

「あんた、この人にお礼言わんといかんのよ」

照江がそう口を添えた。

サチコを火とすれば、水のように冷静で、気のやさしい娘だったのである。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbo

「そんなお礼なんていりまへんけど、その調子なら、もう大丈夫ですな」
するすると寛太郎は、海女たちに近寄った。
本能的に、サチコは警戒して、からだをすくめた。
「そこのたき火のそばに薬籠がおますやろ。中にお汁粉が入ってますさかい、その湯呑みに入れて食べとくなはれ。ちゃんとお餅もこんがり焼けとるはずですワ」
この男、一体何者だろうかとサチコは疑った。
伊勢・志摩の海では真珠がとれる。
けれど、このあたりの海に真珠筏を浮かべて獲る養殖真珠の浜上げは、ふつう十一月以降ときまっているから、いまごろ真珠ブローカーがやってくるのはすこし早すぎる。
といって、海女たちの獲るアワビやサザエを買いにきた男とも思えないのだ。
むろん、この辺は観光客の入り込んでくる場所とは言えない海女の仕事場だったから、いよいよこの男の正体が分からなくなってくる。
サチコは、うさん臭そうな眼つきで、すっかり海水に濡れそぼっている男の顔を睨みつけた。
満月がすこし間のびしたように丸い顔であった。
その丸い顔にしょぼついた眼と団子鼻とおちょぼ口がくっついて、なんとなく照れ臭そうな面持ちをしている。
からだも手足も、ふつうよりはいく分小型で、どこからみてもいかにも非力な男なのだ。
そのくせ、踏んでも蹴られても、また起き上がって、ちょこちょこと食い下がってきそうな雑草的バイタリティが、その男の全身から、むんむん匂ってきて、いかにも雄臭い。
「僕、自己紹介をさせて頂くと、こういう者なんです」
こんどはがらりと言葉つきまで標準語に改まって、男は、濡れたズボンの尻ポケットから革の札入れを取り出すと、しめっぽい一葉の名刺を取り出した。
太陽芸能プロダクションKK
企画部　山本寛太郎

サチコと照江の二人は、顔を寄せ合って首を傾げた。
「実は、テレビのショー番組に出て頂きたいんですよ、あなた方お二人いっしょに……」
そう言って、寛太郎は恥ずかしそうに笑った。
笑うと、糸切り歯がこぼれて、いかにも柔和なのである。
この人の笑顔だけは憎めない。
サチコは、まだ疑わしそうに、いきなり奇妙なことを言い出したこの男の丸い顔をみつめていた。
「どうでっしゃろ。うまく行けばタレントにだってなれないことはありませんし、それまでの間、一日千円の出演料で御契約ねがえませんやろか」
「一日千円？」
疳高いサチコの声がはね返ってきた。
「ええ、アゴ・アシ別の千円ですからね」
アゴというのは食事代、宿泊料、アシというのは交通費のことなのである。
それだけ出せば、こんなまだ乳臭い海女の見習い娘を口説き落とすのは訳のないことだとタカをくくっていたのだ。
だが、サチコは鼻先ではじき返した。
「あんた、アワビの値段、いくらしてると思うてるの」
「アワビ？」
磯のアワビの片想いという歌の文句なら知っていたが、相憎魚屋に知合いはないと思ったのだ。
「あんた、アワビを食べたことがないとみえるわね」
言いにくいことを、ずばずば言ってのける娘であった。
「実は、ジイさんがアワビを咽喉へ詰めて死によりましてな」
われながらまずい嘘だと寛太郎は首をすくめた。
「そんなら教えたげる。その日その日の相場によって上がり下がりするけど、大体アワビ一キロが六百円として、一日に一人前の海女なら、軽く二十キロは水揚げしてくるわね。あんた暗算できるんやろ」
まことに生意気な小娘なのだ。
寛太郎は口の中でもぐもぐと声を殺して計算した。

六百かける二十は、二六、十二で、〇が三つくっつくから、どうやり直しても一万二千円という勘定になる。
「そんなに稼ぐんでっか、海女さんは……」
ちょっぴり妬ましさに声がふるえていた。
「ええ、シーズン中ならね」
澄ました声でサチコは答えた。
だからこそ、貝一つに生命を縮める海女だって出てくるのだし、こうして自分も海女になって家計を助けようと考えているのだと、サチコは胸を反らした。
「一日一万二千円、そんなら僕も海女に転向しよかしらん」
それごらんと、サチコは小鼻をふくらませた。
一日一万円以上稼ぎ出す海女の志願者をつかまえて、一日千円の出演料で口説きにくる芸能プロのスカウトなんて、なんてまあ世間知らずなんだろうと、十六歳の肩をそびやかしてみせたのである。
「弱ったな。千円にもう一声色つけさしてもろうても、こらあきまへんやろな」
すっかり打ちしおれている男の顔が、いかにも間が抜けて哀れに思えた。
「と言うて、このまま手ぶらで帰ったんでは、それこそクビに係りまっさかいな……」
しょんぼりと肩を落として、男は、たき火のそばに腰を下ろした。
絞っても絞っても、まだしずくの垂れてくる男のワイシャツがぴったり胸に貼りついて、縄のようによじれたネクタイが、いかにも物悲し気に垂れ下がっている。
「でも、私たち、まだ一人前の海女とちがいますよって、ちょっとの間やったら、テレビに出してもらっても……」
いままで黙っていた照江が、ちらちらとサチコの横顔に眼を向けながら、そう言ってまんざらでもない様子を示した。
やはりテレビに出られるという魅力の強烈さが、稚い海女の打算を上回ったのかもしれない。
「サチコ、あんた、どう思う」

「ふん、そら、ちゃんとした話やったら」
ひそひそと二人は相談をはじめた。
この分ならあと一押しで陥ちかねない。
急いで寛太郎は用意してきた汁粉を湯呑みによそって、いそいそと二人にすすめた。
とにかく海女の実演という企画をたてて社長に売り込んである以上、ここはどうでもスカウトしてこなくては信用にかかわる。
一日も早く一人前の興行師になってやろうと、独立することばかりを考えていた寛太郎は、是が非でもこと一発、自分の企画を当てて置きたかったのだ。

勝てば大尽、負ければ乞食。
およそ興行の世界ほど勝ち負けのはっきりした所はなく、たとえ二十三歳の若僧であろうと、一発当てさえすれば、たちまち一流の興行師にのし上がることが可能なのだから、決してどんな逆境に突き落とされても夢を捨ててはならないのだ。
虹をつかむか、馬糞をつかむか。

伸ばした手は長いほどよく、拡げた風呂敷は大きいほど獲物が多い。
「どうでっしゃろ、一日千五百円の出演料で、必ずあなた方を全国の人気者にして上げるという条件では……」
人気者と言ったところで、ドサ回りの人気者もあれば、チンドン屋の人気者だっているのである。
「そやけど、そういうあんたが善人なのか、それとも悪人なのか、それがまず問題やわ」
またしてもサチコは、一番痛い所をぐさりと突いてきた。
だが、あんたは善人か、それとも悪人かと、真顔でたずねられて、即座に答えられるものではない。
たいていの人間なら、あいまいに笑ってゴマ化すところだったが、寛太郎はすこしちがっていた。
「そら、悪人にきまってますがな」
あっさり言ってのけてにっこり笑った。
「まあ……」
さすがにサチコは呆れて二の句がつげなかった。

この男、すこし頭のネジがふつうよりゆるんでいるのではあるまいか。それとも自分たちを小娘と見て甜めているのだろうか。

そうでなくては、こうもぬけぬけと俺は悪人だなんてうそぶいてはおれまい。

サチコは鼻白んで、いく分むっとした。

「そう、そんな悪い人の言うことなんか、何一つ信用でけへんわね」

もうこれで話は終わったと思ったのだ。

だが、照江は、そうは思わなかった。

悪人か善人かとたずねられて、自分は悪人だと素直に認める人間に、真の悪人はいるまいと考えたのだ。

その点、照江はサチコより二歳年長であっただけに、いく分世間というものを知っていた。

「それで、一体、どんな悪いことをしやはったんですの」

そう問い返してみる価値があると思った。

いや、みずから悪人だと告白する男に、深い興味を覚えたのかもしれなかった。

「どんなと言われると、困るな」

寛太郎は頭をかいた。

そう反問されてみると、それほど威張ってみせるほど豪勢な悪事を働いた訳ではないのだ。

「まさか、人殺しなんかしてはらへんでしょ」

「人殺し……。豚やったら一ぺん殺しかけたことおますけど、あれはすごい勢いで逃げ回りよりましてな。しまいにヒーヒー泣きよって、どうしても包丁で突くことがでけしまへんねン。そこでしょないよって、アルバイト代を返して、勘忍してもろうたんですワ」

「じゃ、泥棒、しはったのね」

こんどはサチコが詰問の矢を放った。

みずから悪人だと名乗る以上、せめて泥棒ぐらいは働かなくては、悪人の資格がないと言わんばかりの口振りなのだ。

寛太郎は、待ってましたとばかり大きくうなずいた。

「そら、お手の物ですワ。何しろ泥棒が毎日の仕事みたいなものでしたから。その頃は、いつも昼寝て夜に

なったら盗みに出かけましたな。人によっては、置引き言うて、駅でぼんやり汽車を待っている旅行者の鞄を失敬してくるのを得意にしている者もいてましたが、そういうことは僕苦手ですねん。そこで、もっぱら進駐軍のキャンプばっかり狙うて、鉄条網の下に穴掘って潜り込みますねン。むろん目的物は罐詰に服に靴。煙草なんか、なんぼでも盗めましたな。一ぺんモンサントのサッカリンの罐盗んで、一罐何千円にも売れた時のうれしさ。あんなたのしい生活、後にも先にもあの時一ぺんこっきりでしたな」

うっとりと寛太郎は眼を細めた。

「鞭声粛々夜河を渡る、という詩がおますやろ。そういう心境でっせ。真っ暗闇の丘の上に、点々と仲間の黒い影が浮かんで、さっと鉄条網めがけて突貫ですワ。むろんつかまったら銃殺されるかもしれへん。スリル満点でしたな」

「それ一体、いつ頃のお話やの？」

この男、妄想狂かなにかではあるまいかと照江は疑ってみた。

そうでなくては、こうべらべらと自分の悪事を他人に語れるものではあるまい。

「いつ頃て、あんた、終戦直後でしたからな。ちょうど十二か十三の頃でしたな」

「なんや、そんならあんた非行少年やったのね」

十年も昔の悪事かと、サチコはがっかりした。

「はア、今で言うたらそういうことになりますやろな。当時、空襲で家は焼けよる、お袋と妹は防空壕に入ったまま死んでしまいよる。親父は兵隊で戦死するちゅうような状況でしてな。泥棒でもせんことには、食べて行けしまへなんだ」

「つまり戦争孤児やったのね」

それなら無理もないと照江はうなずいた。

「いや、そんな大袈裟な者やおまへんけど、毎日泥棒学校へ通うとったようなものでしたワ。そやけど、僕無器用でしてな。泥棒生活十日目に、とっ捕まって、それからしばらく進駐軍の靴磨きをさせられました。自分の頭より大きなドタ靴を毎日何十足も磨かせられて、こらかなわんと、また逃げ出しましてん」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbo